

## 青いレモンの殺意

春

あの合格発表は今でも信じられません。でも、もう疲れしました。あなたと一緒に机を並べて勉強できなくなるのだけが残念です。

ため息が出た。我ながら月並みな文章だ。人生最後の手紙なんだからもつと名文がすらすら湧き出てくるものだと思ってたんだけど……。

まあいいや。『遺書』と書いた封筒の上に石を乗せて飛ばないようにしてから崖っぷちに立った。

遥か下に見下ろす海面から物凄い勢いで風が吹き上げてきてよろけそうになる。死ぬ気でなくてもここに立てば体を持ってかれそうだ。それに三月の日本海は死ぬほど寒くてさつきから足が笑いっぱなしだ。早いとこ済ませてしまおうよ。

まだ寒々とした日本海が目の前に広がる。

「さよなら」

意味もなく呟いて地面を蹴った。迫ってくる海の色は青じゃなくて灰色に見えた。

夏

「それでは、今年の生徒会の演し物は寸劇ということにします。異義はありませんか」

生徒会長の交野（かたの）徹がまとめにかかった。黒板には『レトロ学園祭の演し物について』と議題が書かれている。

この『レトロ』って企画にすっかり毒されて近頃交野の言動は三十年前にタイムスリップしてしまってる。気のせいとか口調まで金八先生のホームルームみたいだ。

「それでいいじゃん」

運動部長の矢野昌司（まさし）が言って席を立とうとした。副会長の安田香代がひと睨みする。

「おお恐わ」

目線に気付いて、矢野は大げさに肩をすくめながら席に戻った。

「あほう」

文化部長の水野由布子が恐る恐る手を上げた。

「はい、水野さん」

「デューク・なんとかの『おさななじみ』に合わせて寸劇をやるうというんですよね。その曲って三十年前よりもっとずっと古いんじゃないですか」

「お、よくご存知で。『おさななじみ』は、作詞作曲が永祿輔、中村八大のロツパチ・コンビ。時は、昭和三十八年。NHKの夢であいましょうという番組の六月の歌でデューク・エイセスが歌ってヒットした往年の名曲なのであります。つまり、東京オリンピックの前の年。三十年前の昭和五十二年より遡ると十余年……」

講談調は止めるって……。相変わらず無駄にトリビアの多いやつだ。

「ま、雰囲気。雰囲気」

へらへら笑ってる交野の横で発案者の本田圭治がうつそりと瞑っていた目を開いた。

「学園祭のテーマにも合うと思うけど」

低いけれどよく響く声で答える。彼は会計をやっている。今年の学園祭のテーマは交野の強行採決で『友情』に決まったのだ。

「あの曲って最後の方でキスをするって歌詞が出てきたんじゃないやあ……」

彼女の声は尻すぼみに小さくなった。

「工夫次第だろ。傘を開いてその陰に隠れちまうとかすれば、それらしく見えるよ」

本田はぶつきらぼうに答えた。水野はまだ何か言いたそうだったが結局口をつぐんだ。

「他に意見はありませんかあ」

交野が金八先生モードで問い直す。誰も口を開かなかった。矢野はわざとらしく窓の方を向いて知らん顔をしていたし、本田はうつすらと目を開けて黒板を見ていただけだった。水野はまだおどおどした目付きのままだったが、軽く頷いて意見のない意思表示をした。

「では、決定とします。来週から夏休みですので練習は二学期からということ。他に何か……なければ生徒会執行委員会を終了します」

矢野が、真っ先に席を立って部屋を出た。

「ああ、うざってえ」

聞こえよがしの声が廊下に響く。それに応えるみたいに蝉時雨がひとしきり騒がしく聞こえた。俺はやれやれと一つため息をついた。

## 秋

十一月の第一木曜。俺は生徒会室へと廊下を急いでいた。学園祭は十日後、今日は寸劇の総仕上げだ。まず自己紹介を済ませておこうか。俺の名前は葛城

穰（かつらぎゆずる）。県立松沢高校の二年生で生徒会書記の肩書きを持っている。身長百七十センチ、体重六十キロ、趣味は……、  
「おっと、ご免よ」

ぼんやり考えながら歩いていたらヘルメットを被った工事のおじさんにぶつかってしまった。今、学校は改装工事の真っ最中で、放課後になると業者のラッシュアワーになる。昨日は遅れてばかりいる大時計の修理業者が来ていたし、今日は壁の塗り替え業者と、廊下の内装工事、明日は古くなったトイレの改築業者といった具合だ。全部、創立三十周年の学園祭を目指してのことだったけれど、そんな外部の出入りがルーズな状況がこれから起こる殺人事件の容疑者の範囲を広げて警察を手こずらせることになるなんて、もちろん誰も知る由もなかった。四階の廊下を端まで歩くとちよつと狭い階段があつて上り切ったところが生徒会室だ。

何の話をしていたっけ。そうそう、俺の趣味だ。人間観察と謎解き。ミステリーを読みながら犯人を推理したり、教室で起きる小さな事件——失せ物、いざこざ等々——にすぐ首を突っ込みたがるというあまり褒められやしない癖を持っている。推理の成果の方は五分五分といったところかな。見事に命中することがあるかと思うと、まるで的外れなこともあるといった具合だ。

階段を駆け上がると小さな踊り場に出る。引き戸を開ければそこが生徒会室

だ。中を覗くと生徒会長の交野徹が窓から外を眺めていた。

「なんだ。まだ誰も来ていないんだ」

俺の声に交野は振り返った。俺と似たような背丈なのに五キロは軽いから、やたらひよろつとした印象を与える。親父さんは県警の警部でその血を引いたのか正義感が強い。ただ、やたらに堅くて融通が利かないので話していて疲れる時がある。大体、髪を七三に分けている高校生なんてこのご時勢、ギャグかコントのネタにしかかなりやしない。

「あら、まだこれだけ」

背中がした。振り向くと副会長の安田香代が立っていた。同じく二年生。俺と大して背が変わらないから女の子としては結構上背のあるほうだ。交野に負けず劣らず正義感が強く男勝りな彼女は、一部の男子生徒からは敬遠されている。見ていて小気味よいので俺は結構彼女の人柄を気に入っているが、運動部長の矢野昌司などは、はっきりと彼女を嫌っているようだ。

「たるんでるわねえ」

ご自慢のショートカットを振り振り大げさに肩をすくめた。

「すみません。遅れてしまって」

安田の後ろで消え入りそうな声をした。階段を駆け上がったって来たらしく、水野由布子は肩で息をしていた。安田と同じく細身ながらすらっと背が高いので

大阪の京橋にあるビルを連想して俺は秘かにツイントワーなど二人ワンセツトの渾名を付けている。

「大丈夫よ。君が最後のわけじゃない」

安田が豪快に肩を叩いて慰めた。

「ほら、ちょうど三時になったところよ。今より後に来る奴が遅刻なの」

壁の時計を指差して言ったが、水野はまだおどおどした目で何か言おうとしていた。不意に彼女の後ろで低いうめき声のようなものが聞こえて、彼女の肩はぴくんと震えた。会計の本田圭治が戸口から顔を出して「ウォッス」と、妙な声を絞り出したのだ。彼は俺にとって一番未知数の多い人間だ。もともと口数も少なく、その目は何を見ているのかいつも細められている。他校の不良グループと付き合いがあるだとか、生徒会費を横領しているだとか、暗い噂ばかりが立っている気味の悪い存在だ。

「後は、矢野君だけか」

安田の言葉には険があった。彼女も彼のことは虫が好かないようだ。絵に描いたような犬猿の仲といったところか。

三時五分を過ぎても矢野は現われないので、先に練習を始めようかと話している矢先だった。生徒会室の奥でバンという大きな音がした。ここの奥はまた踊り場になっていて梯子を上がって屋根裏のような物置に上がれるようにな

っている。今のはその物置の扉――船のハッチのように上に持ち上げる奴だ――が勢いよく閉まる音に聞こえた。

「誰かいるのかしら」

安田が奥に続く扉を見ながら言った。

「ちよつと見てくるよ」

気軽に言つて俺は立ち上がった。踊り場に出て梯子を上がり始めると皆も興味があるのか下に集まってくる。

檜材の重い扉を持ち上げると、むつとするような熱い空気が流れてきた。扉を倒して身体半分程を物置のなかに乗り出した。どういふ訳か部屋の真ん中に置いてある大型の石油ストーブが焚かれていて盛んに熱気を放出している。ストーブの上では用務員室から持ち出してきたのだらう。やかんが湯気を吹き出していた。窓は開いていたが、気温を下げる役にはあまり立っていないようだった。

何かの紙片が扉の門に紐でいくつも結わえてあつて放射状に床に広がっていた。そして……、部屋の隅に矢野が倒れていた。

俺は部屋の中に飛び上がった。矢野の傍に駆け寄つたが、一目でもう手遅れだと悟つた。滅多刺し――。彼の上半身は黒いTシャツの上から一面に刺し傷だらけだった。出血の一番ひどい腹の辺りが最初の一撃だと思われたが、素人

目にもそれだけで充分致命傷になっただろうと推測できた。

だが犯人はそれに飽き足らず、矢野を刺し続けたようだ。しまいには刃が折れてしまったのだろう。矢野の胸に柄をなくした包丁の刃が深く刺さっていて、柄の方は矢野の傍らに転がっていた。

俺は吐き気を必死で押さえながら這うようにして梯子に戻って行った。

「一一〇番してくれ」

俺は梯子を下りながら叫んでいた。

「誰も上がっちゃいけない。矢野が殺されてるんだ」

こういう場合、現場を荒らしちゃいけないという事くらいは俺も知っている。警察——捜査主任は幸か不幸か交野の親父さんだった——が来てからは、そこそを上を下への大騒ぎだった。鑑識が物置に入る。手帳を持った私服がうろろする。俺らも調書を取るために順番に応接室に呼ばれた。特に第一発見者の俺は一番に呼ばれて、同じ事を繰り返し、手を替え品を替え質問された。

「あの、物置の床に散乱していた紙は一体何だったんですか」

質問の切れ目を見計らって、俺は気になっていたので警部に逆に質問した。

「そんなことを聞いてどうするつもりだね」

やっぱり親子だ。警部は用心深そうに俺を睨んだ。

「いやあ……」

俺は言葉につまった。

「まあいい。五十センチ×十五センチの厚紙に『友情』と書いた紙が物置の扉の門に紐で結わえられて放射状に広げられとったんだ。全部まん中で引き裂かれてな。残り半分は壁の釘にぶら下がっていたよ。被害者がやったにしろ、犯人にしろ一体何のまじないのつもりなんだろうな」

最後の方は独り言のように呟いた。

「それなら心当たりがあります。今年の学園祭のテーマ・カードですよ、きつと」

松沢高校の学園祭では、毎年二字熟語のテーマが決められ、出展される作品や上演される芝居、音楽も基本的にそれに添ったものが選ばれる習慣になっている。

今年のテーマは「友情」だ。毎年テーマが決まると生徒会執行部が中心になってテーマ・カードが作られる。五十センチ×十五センチの厚紙に色とりどりのサインペンでテーマの文字を大書し、上下に一メートル程の紐を付けて教室の窓に飾る代物だ。伝統とはいえ学園祭に付けるテーマにしろテーマ・カードにしろセンスが百年ほど古い気がしているが、風が吹くとカードがくるくる回って縁取りをした色紙が光る様はなかなか綺麗だ。

確かまだ縁取りが終わっていない五十枚程を物置の壁の釘に引っ掛けてお

いたはずだ。俺はそのことを警部に説明した。

「でも、どうして半分に破いたんだろう。結構たいへんな作業だと思いますよ、あの紙、丈夫だから」

半分独り言のように俺は言った。それから、ふと思いついて警部に尋ねた。「中で一枚だけ他と違う紙が交じっているといった事はなかったですか。一枚だけ焦げていたとか」

何のためのトリックか分からないが、枝を隠すなら森という言葉が浮かんだのだ。

「いや、丹念に調べたが全部同じだった」

答えてしまってから、警部はぎろりとこちらを睨むと芝居がかった咳払いをした。

引き裂かれた「友情」のカードか……。まったく何のまじないだろう。

ドアがノックされ私服が入ってきた。警部に何か耳打ちして、警部が低く答えると手に持った紙袋を置いてまた出ていった。

「さて、もう一度おさらいをしようか……。まあそんな嫌な顔をしないでくれよ。大体君はこういうことが大好きだっていつも徹から聞いているぞ」  
言いながら警部は現場の略図を書いた紙を広げた。

「君が生徒会室に着いたのは何時ごろだった？」

「三時五分くらい前だったと思いますよ」

「その時、生徒会室にいたのは徹だけだったんだね」

「ええ」

「君の後には、誰が来たの？」

この質問に答えるのは一体何度目だろう。俺はいい加減うんざりしていた。  
「安田さんが来ました。時間は三時少し前だったと思います。その次に、水野さん。生徒会室の時計で三時丁度です」

安田香代の言葉を思い出しながら俺は続けた。

「最後に本田君が来ました。水野さんが来たすぐ後だったと思います」

「物置の扉が閉まる音を聞いたのは何時ごろだったか覚えてるかい？」

「たぶん、三時五分頃じゃないかと思います。先に練習を始めようかと言った矢先ですから」

「物置の扉が閉まったとき、君達五人は生徒会室にいた。間違いないね」

警部はしつこく念を押した。

「ええ」

一体何だってまた、同じ質問を繰り返すのだろうか？

「何の集まりだったの」

「学園祭の寸劇の練習ですよ」

生徒会執行部の余興は何代か前の生徒会長が始めたことで、これもいつのまにか恒例になっている。今年は本田のおよそ彼のキャラとは似付かわしくないロマンティックな提案で、中村八大の『おさななじみ』の歌に合わせたミュージカル風の寸劇を演る予定だ。そのことを警部に説明した。

「ふーん。凝ったものをやるんだねえ」

芝居の中身に興味があるわけじゃないのだろう。警部の言葉は、おさなりに聞こえた。

「まあともかく、君達五人は唯一完璧なアリバイを持っているということだな」  
「どういうことですか」

俺の質問に警部は妙な笑いを浮かべた。

「目撃した生徒がいたんだよ。三時五分過ぎに校庭を歩いていて、何気なく屋上の方を見上げたら現場の物置の窓からぶら下がっている人間がいたそうだ。時刻からいっても、犯人に間違いないだろう。バイクのフルフェイスのヘルメットを被っていたから顔は分からなかったらしいが、君と同じ色と柄のトレーナを着てジーパンを履いていたそうだ。その人物は窓から手を離して飛び降りると大時計の前を通り、生徒会室と反対側の階段の方へと走って行って見えなくなった。どうやら犯人は矢野君を刺してから扉を蹴飛ばすかして勢いよく閉

めると、窓から逃げたらしい。つまりその時刻に物置の真下にいた君達は少なくとも犯人じゃないわけだ」

警部は犯人の心当たりについて聞いてきたが、俺には思い当る人間は特になかった。

「一つ気になることがあります。犯人の着ていたトレーナって本当にこれと同じ物だったんでしょうか」

「間違いないさ」

警部は私服が置いていった紙袋の中からトレーナを取出しながら言った。

「こいつが屋上から下りてくる階段の途中にヘルメットと一緒に捨てられていたそうだ。目撃した生徒にも確認したよ」

派手なピンクの地に校章の矢車の模様が白く染め抜かれている。間違いない。「でも、このトレーナは今度の寸劇用に六人分だけオリジナルで作ったんです。生徒会室に集まった時俺らはみんなそのトレーナを着ていましたよ。だから、犯人がそのトレーナを着ているはずがありません」

「なんだって」

警部は目を剥いた。

……俺は暫らく目を閉じて考えた。

「すみません、混乱させてしまったみたいですよ。答は一つしかありませんね」

俺はゆっくり言った。

「それは、矢野のトレーナですよ」

殺された彼が黒っぽいTシャツを着ていたのを思い出した。でも、犯人はなぜ矢野のトレーナを着て逃げたりしたんだろう。警部も俺と同じ思いなのか急に考え込んでしまったみたいだった。その後の質問は形式的なものばかりで、それが済むと呆気なく俺は放免された。俺は、まだ上の空で考え事をしている様子の警部を残して応接室を後にした。

何か俺の頭の中で引っ掛かっている。誰かが描いた図式を見せられているというか、まだよく分からないけれど誰かの作為がこの事件全体にオブラートを被せているような気がしてならなかった。俺は図書館の司書室に行った。図書委員を兼ねているのでこの部屋への出入りは自由だ。何か考え事をするときにはいつもここに来ることにしている。

戸を開けてみると案の定誰もいない。窓際の椅子に腰掛けて校庭を眺めながら情報を整理してみた。

聞こえた音と、聞こえなかった音の問題。現場はなぜ密室でなかったのか。目撃して下さいと言わんばかりの、あの派手なトレーナを着ていた犯人。

俺の頭の中でいくつもの疑問が渦をまいていた。それでも三十分後に、図書館を出る頃にはいくつもの謎が解け、いくつもの新しい疑問が湧いてきた。犯

人は――誰かはまだ分からないけれど――何らかのトリックを使ってアリバイ工作を施した。そして、その犯人は俺を除く――自分が犯人じゃないことは分かっている――四人の執行委員の誰かだということだけは間違いないかった。だが、まだ警察に話せるような状況じゃない。まるで証拠のない話だし、何もかもが分かっていたわけじゃないからどこかに大きな落とし穴があって、最初から大間違いをしている可能性だってある。もう少し自分で調べてみるしかなさそうだった。

次の日には一通り捜査も済んだらしく生徒会室も開放されていた。昨日と同じ三時頃に顔を出すと交野が一人で窓から校庭を眺めていた。

「何か珍しいものが見えるかい」

俺が尋ねても彼は振り返らなかった。

「別に」

彼と並んで窓から見下ろす。歩いている人が案外小さく見えて改めてこの部屋の高さを感じる。よっぽど知った顔でもなきや、誰が通ってるのかなんてわかりそうもない。

今朝、通達が出たからだろう。みな急ぎ足で帰っていく。部活動は当面禁止。学園祭も中止となった。

反発を唱えるクラスメートも少なくなかったけれど、学校側としては当然の

措置なのだろう。

「誰なんだろうな。矢野を殺したのは」

外に目を遣ったまま俺は切り出した。

「さあな。一部の女子からは人気があったけれど我侘なところがあつたから、嫌っている奴はとことんだつたみたいだね」

交野の言葉は硬かった。

「嫌いなだけで人を殺す奴なんかいないと思ふぜ」

俺は笑って、次を促した。

「じゃあ、あいつが死ぬと得する奴か、あいつに酷い目に合わされた奴か……、いや、案外もつとつまらない理由かもしれない。たとえば、水野のファンがいて、あいつとキスシーンを演るのが許せなかったとかな」

言いながら交野は低く笑った。けれど、その目が一瞬真顔になったのを俺は見逃さなかった。交野も俺の目線に気付いたのか急に狼狽した顔になって怒った声で言った。

「……お前またいつもの調子で嗅ぎ回っているのか？ いい加減にしろよな。仮にも人一人が死んでいるんだぜ」

「しおらしい顔をしているだけが仲間の弔いじゃないと思ふだけさ」

俺は思った通りのことを言い返した。別にこの事件を調べようとしてること

を隠す謂れはない。

『おさななじみ』の歌詞は十番までである。男子四人女子二人のうちから一人ずつ交替で真ん中に出て、歌詞に合わせて演技をし、残りの四人が両側の前に出て歌を歌う趣向だ。

どの歌詞を演るかはおみだで決めたが、問題のキスシーンのある八番は、矢野と水野が演ることになっていた。その時だけ、雨傘を広げて陰に隠れた二人が少しくつついてそれらしく見せるといふ演出だった。交野が矢野に嫉妬して、刺し殺したなんていう馬鹿馬鹿しい可能性があるだろうか？

戸が開いて安田香代が顔を出したので俺の思考は中断された。

「交野君、教頭が呼んでるわよ」

殺人事件の後処理で何か相談があるのだろうか。二人が出て行ったので俺は一人生徒会室にとり残された。

ふと机の上を見ると交野のカバンが置いたままになっていた。戸口から顔を出して誰も上がって来ないことを確かめてから俺は迷わずカバンを開いた。

教科書、筆箱、ノート。四つ折りにした試験の答案。めぼしいものは何もなかった。もつとも俺自身何を探しているという当てもなかったが。ノートを開いて中を確かめていく。三冊目のノートを開いた時、俺は苦労が報われたことを知った。

ノートの最初のページには「松沢高校不正入試に関する調査報告書」と書かれていた。筆跡は交野のものだ。二ページ目以降にはここ数年にわたって松沢高校で行なわれた不正入試の手口とその関係者に関する調査報告が克明に記されていた。およそ信じ難い事だったけれど、貼付されている証拠物件を見てしまつては信じないわけにいかなかった。

不正入試の手口のあらまはこうだ。まず、教師が願書を出してきた学生の中からめぼしい人物をリストアップし、仲介屋を立ててその親に不正入試の話をもちかける。

料金は前金と後金に分けられていて念書を交わし、契約が反古されないようにお互いを縛っていた。

契約が成立すると入試の採点を受けもつその教師が答案のすり替えを行なうらしい。つまり本来合格しているはずの学生が一人、不正を犯した人間のために不合格にされる仕組みになっているのだ。

それだけでも許し難い話だったけれど、この仕組みを考えた人間はもつと厚かましかった。

松沢高校は曲がりなりにも進学校で、入試の成績の上位三十名は、入学式の日にな名前が張り出される。きつと、不正入試に一枚噛むような父兄には見栄っぱりな連中が多いのだろう。すり替えはその三十名の中に入っている学生と行

なわれていたのだ。

俺は心底腹を立てた。一所懸命に受験勉強に励んできた学生が、不当な扱いを受けていたことはどうあっても許せなかった。公立高校は受験日が一斉だから滑り止めを用意するという訳にはいかない。私立に入学できる程豊かな家庭でなければ犠牲者はその年の高校進学を諦めるしかない。いや、大抵の場合、浪人などのんきな身分にはなれずに、永久に進学を諦めざるを得ないんじゃないだろうか。

しかし、交野はなぜこの話を知って、調べ始め、調べ得たのだろう。

ノートの後半はごわごわして分厚くなっていった。どうやって手に入れたかは知る由もないが、領収書や念書のコピーが貼り付けられ、このノートの内容が紛れもない事実だということをも物語っていた。

念書の束のなかに……、矢野の名前があった。少なくとも彼を殺したい程、憎む動機とその動機を持ち得る人物を俺は一つ掴んだ。交野が正義感にかられて殺したという可能性はどうだろうか？

「葛城君」

不意に背中がして俺は飛び上がりそうになった。振り向くといつのまにか水野由布子が立っていた。

「まだ残っていたの」

彼女が部屋に入って来たので俺は急いでノートを交野のカバンに突っ込んだ。

「事件のことを考えていたんだ」

俺は平気な顔をして答えた。

「で、探偵さんは何か手がかりを掴めた？」

俺の悪癖は、相当有名らしい。

「今の段階ではまだ話すことは何もないよ。ワトスン君」

言って俺は、にやっと笑った。

「でも、俺なりにこの事件を調べてみるつもりだ」

「あの、わたし……その……ワトスンの役にしてもらえないかしら」

水野は何度も口籠もりながら言った。

「あまり評判のいい人じゃなかったかもしれないけど、あんな殺され方……

……酷いと思う。それに……」

水野は口を一旦つぐんで照れ臭そうに笑った。

「わたし、推理小説が大好きなの。探偵の仕事にも興味があるし、ホームズな

んて贅沢言わないからワトスンをやらせて」

「別に構わないけど」

言いながら俺は訝しんだ。この内気な女の子をこれほど積極的にさせている

原動力は何だろう？

俺の発想はいつも懐疑的で少し意地悪だ。推理小説云々なんて話は端から信じていなかった。そう、水野も容疑者の一人なのだ。

「ありがとう。で、何かから始めるの」

俺の言葉を聞くと彼女は本当に嬉しそうに笑った。心の中に何を秘めているのか知らないけれど、彼女は手練れの役者だと俺は思った。

「まず、現場をもう一度見に行こう」

「でも、まだ立入禁止じゃないの」

「構うもんか」

言いながら俺は屋根裏に上がる扉を開けた。先に俺が、続いて水野が梯子を上った。現場は概ね昨日のままだったが、引き裂かれたテーマ・カードはもう片付けられていた。

「あそこに矢野君が倒れていたのね」

矢野の倒れていた場所には白い人型が描かれていた。ストーブ、開いた窓は昨日のままだ。犯人はどんなトリックを使ってあのアライバイを工作したのだろうと俺は考えた。ふと、部屋の隅に山積みさされているがらくたに目を遣った。野球のバットとグローブ、テニスのラケット、演劇部が使っていた仮面、何年にもわたって増えていった参考書。

その中に、失くなっている物がいくつもある。演劇部が使っていた大きなマント、返り血を避けるために使われたそうで警察が押収していった。模擬店で使うはずだった包丁は凶器に使われた。先代の生徒会長が置いていったヘルメット、犯人はこれを失敬していったらしい。

実はこのヘルメットにはちよつとしたエピソードがある。昨日、取り調べられている最中に一人の刑事さんがこのヘルメットを持って部屋に飛び込んできたのだ。緊張した面持ちでその人は交野の親父さんに何か囁いた、囁き返す親父さんの言葉の端に「DNA」という単語を聞き取って俺はピクつと反応した。

「あのお。もしかして、そのヘルメットって犯行に使われたんですか？」  
交野の親父さんが、ぎろりとこちらを睨む。

「それで、もしかして付着している髪の毛を採取して、DNA鑑定しようとか？ だったら、たぶん無駄ですよ」

「どういう意味だね」

「それって、屋根裏にあつたやつですよ。横つちよに目立つステッカーが貼ってあるからすぐわかります。でも、そのヘルメットって不特定多数の人間が何度も被ってるんですよ」

親父さんは怪訝な顔をする。当たり前前だろう。普通、ヘルメットは持ち主以

外に用事がなければ被るもんじやない。ただ、先代の生徒会長のヘルメットとなれば話は別なのだ。彼には伝説に残るニックネームがあった。「ミスター・ウォーターメロン・ヘッド」——スイカ頭というわけだ。七十二センチあったという先輩の頭は並みのメットではてんで入らず特注だった。だから、他の誰が被っても頭の上で三百六十度回転してしまう代物だったのだ。先輩が在学中はこっそりと、卒業してからは——どうして、先輩がこのメットを置いて行つたかというのも一つのミステリーだが、それはまた別のお話ということで——大っぴらに、生徒会室に顔を出した生徒は誰もが一度はチャレンジしている。まるで、シンデレラの靴か王様の剣みたいだけど、いの一番に試したのは俺たち執行部の面々なのだから威張れたもんじやない。その話をする、警部は気の毒なくらいがっかりした顔をしていた。しかし、いくら顔を隠すためとはいえ、よりによつてあのヘルメットを使うとは——。ぶかぶかとはいえ、そう簡単に外れるもんじやないだろうけど。犯人は走るのに結構苦労したに違いない。

でも、巧いやり方だ。その場にあるものを使えばそこから足がつくことはない。意識をがらくたの山に戻しながら俺は考えた。頭の中でさつきから何か引っ掛かっているのだけれど、それが何なのかどうしても分からなかった。ほかに、あまり見るべき物もなかった。俺らは生徒会室に戻った。

「何を考えているの」

窓からぼんやりと校庭を眺めている俺に水野が尋ねた。

「殺人の衝動について。――今日はこれでおしまいにして帰ろう」  
俺は振り返って言った。

生徒会室の鍵を掛けて階段を下りながら水野が聞いてきた。

「葛城君、家どこだっけ」

俺は最寄り駅の名前を答えた。

「じゃあ、同じ方向ね。一緒に帰ろうよ」

「ああ」

「ねえ、殺人の衝動についてってどういうこと」

横を歩く水野が俺の方に顔だけ向けて尋ねた。

「さっきの話かい。なぜ犯人は矢野を殺す気になったんだらうって考えていたんだ」

「殺人の動機ってこと」

「少し違うんだな。ミステリーでは便宜上、説得力のある動機があって犯行の機会があれば殺人は起きることになっている。まあ、謎解きを主眼にしている文学だし、基本的には事件が起きなきゃ始まらない物語なんだから仕方がないんだけどね。でも、現実の殺人は、そんな単純なものじゃないと思うんだ。殺

したい程に憎み続けてきて、絶好のチャンスが訪れたとしても殺人が起きるとは限らない。相手を殺したいっていう衝動が、ある一線を越えなきゃだめなんだ。殺人を犯すきっかけとでも言うのかな。逆に衝動が一線を越えてしまえば、他人から見れば取るに足らない動機でも殺人は起きるし、機会は到来を待たれるんじゃないかって作られるんだ」

「おもしろい発想ね。今度の場合、その衝動ってどんなものなのかしら」  
俺達は校門を抜けて南に向かって歩いた。駅までは十五分程かかる。

「今のところはまるで、見当もつかない。ただ一つ言えることは、犯人の心の中で殺人の衝動がある一線を越えたのはごく最近、せいぜい一、二カ月前までのことだと思う」

「どうして？」

「あの殺人は計画的なものだったけど、何年も前から練りに練った計画という気はしない。殺し方一つとってみてもそうだ。滅多刺しにするというのは憎しみとそれにも増して強い怒りが原動力になっている場合だ。憎しみにしろ、怒りにしろ、芽生えた時が一番大きなエネルギーを持っていて、時が経つにつれて弱まっていくものだろ。二年も三年も前に起きた衝動ならその時に事件が起きてくるよ。それから、その衝動が一線を越えたきっかけって言うのは、本当に第三者から見るとそれこそ『何だそんなこと』って言うようなものじゃない

かと思うんだ」

「どうして？」

水野は同じ質問を繰り返した。

「だって、何の予兆もなしに唐突に事件は起きたように思わないか？少なくとも矢野が誰かと揉めたとか、誰かに付狙われていると言った話を俺は知らない」  
俺の言葉に黙って頷いて水野は同意の意思表示をする。

「でも、何か矢野の周りでごく最近起きてなきやおかしい。ということは、起きていたんだけど第三者である俺たちが気付かなかったようなことだったんじゃないかと考えたんだ。多分——、その線から俺が犯人を掴む事は難しいと思ってる。やつぱり事件の状況や特徴から犯人を特定できる手掛かりを見つけ出すしかないんだろうなあ。それに……」

言いかけて俺は、はっとした。目の端に黒い影が映った。誰かが尾行してくる。男？——、短い髪型——、背丈は俺と同じくらいあるようだ——。水野の方に顔を向ける振りをしながらそつと後ろを盗み見た。十メートル程後ろから、俺達と同じ歩速で本田圭治が歩いていた。

「それに、何？」

水野が不思議そうな顔をする。

「いや、何でもない」

俺はうわの空で答えた。試しに、左手の店のショーウィンドを覗いて立ち止まると本田はわざとらしく電柱の陰に隠れた。こちらが、歩き出すと向こうも歩きだす。歩を緩めると向こうも遅くなる。間違いない。本田は俺達を尾行けてきている。

「どうしたの。怖い顔して」

「何でもないよ」

「ひどいなあ。ワトスンは何でも打ち明けられるたった一人の友人のはずよ」

いつからそんな友人になったんだ——と、心の中でツツコミながら、答えた。

「……、本田が後ろから尾行けてくるんだ」

水野が息を呑む。俺の方に顔を向けたまま、目だけが背後に寄っていく。

「まさか。単にこの道が帰り道なだけじゃないの」

俺の方に目を戻しながら、水野は言った。

「いや、そうじゃないらしい」

ずっと彼女の腕を掴んで、俺は不意に立ち止まった。

「何するの」

彼女は凄いい目で俺を睨んで、腕を振りほどこうとした。

「しっ」

素早く目で合図した。彼女はなかなか良い勘をしている。すぐに俺の意図に気付いてそっと後ろを振り返った。本田はさつき俺が立ち止まった店の前でポケットに手を突っ込みながら、ショーウィンドを覗き込んでいた。

俺は彼女の腕を放してやり、また歩き始めた。駅までは次の角を曲がれば後は真つすぐ一本道だ。さて、どうするべきか。

「確か、次の角を曲がったらすぐに小さな路地があったろ」

「うん」

「そこに飛び込んで、やり過ぎそう」

「巧くいくかな」

不安そうな顔をしながら彼女が言った。急に俺のよく知っている臆病な女の子に戻ってしまったみたいだ。

「試してみる価値はあるさ」

彼女を安心させるように、俺はつとめて笑った。ゆっくりと歩きながら、ときどき本田の様子を窺う。俺達の歩足が遅いせいだろう、本田の顔を何度も苛々している表情がよぎった。

角を曲がる――。俺達は地面を蹴って駆け出した。路地までは五メートル。四歩で駆け抜けると文字通り飛び込んだ。

塀にもたれて俺達は息をついた。水野は息を弾ませながら、制服の内ポケット

トに手を突っ込んで何かを捜していた。

「はい」

彼女が取り出して手渡してくれたのは小さな手鏡だった。彼女の意図を理解するまでに少し暇がかかった。もしかしたら、俺より彼女の方がずっと探偵向きなのかもしれない。俺は手鏡を右手に持ちかえると、路地からそっと腕だけ伸ばしてかざした。丁度、角を曲がった本田が鏡に映って見える。本田はきよろきよろと辺りを見回していた。俺はこの路地に飛び込んだ自分の軽率さを悔やんでいた。普段は用事がないから知らなかったけれど、この路地は袋小路になっっている。もし見つけられたら、文字通り袋の鼠じゃないか。

「どう？」

「俺達を捜しているみたいだ」

急に本田がこちらに向かって走り出したので、俺は慌てて腕を引っ込めた。俺達のすぐ脇を本田が駆け抜けていく。一、二———心の中でゆっくり数えて、二呼吸待った。

「行こう」

俺は彼女の腕を取ると道路に飛びだした。敢えて後ろは振り返らない。元来た道を駆け戻ると、一筋北の道路まで一気に走り通した。

「もう大丈夫みたいだ」

俺は肩で息をしながら言った。後ろを振り返ったが、本田が追ってくる様子はない。

「何だったのかしら」

「さあ」

まだ息が苦しくて、何かを考える気力が湧いてこなかった。

「運動不足ねえ」

ぜいぜいと喘ぎながらふらふら歩いている俺を見て、水野が笑った。

「探偵には体力も必要だと思うよ」

「まったくだ」

つられて俺も苦笑いした。

どこか近所の庭からだろう、木犀の香りが流れてくる。もうすっかり秋の色に染まった夕暮れの町を俺達は黙って歩いた。因果な性格だ――。こんなきれいな暮景の中をよく見ると結構可愛い女の子と並んで歩いているというのに、だんだん息が楽になるにつれて俺の頭の中はまた殺人事件のことで一杯になった。俺の気を散らさないように気を遣ってくれているのか、水野は大人しく隣を歩いていてくれた。そんな彼女を俺は見知らぬ人を見るような目で盗み見た。もしかしたら俺にとって、彼女は本田以上に未知な存在なのかもしれない

――。  
それにしても――、俺はため息をつく。交野にしろ、水野にしろ、本田にしろ、どうして俺の容疑者達は怪しげな行動ばかり取るんだろう。そのうち、安田香代も何か不審な挙動を見せるんだろうか。

角を曲がると駅前に向かう雑踏の中に俺達は吞まれていった。

電車の中で俺達は中止になってしまった学園祭についておしゃべりをした。「あれだけ練習したのに、寸劇はもったいないことをしたね」

「うん……。でも半分は、ほっとしてるの。あのキスシーン恥ずかしかつたら」

頬を染めながら言うと、水野は舌を出して笑った。

水野の降りる駅をアナウンスが告げる。

「今日はありがとう。じゃあ、また明日」

言って、水野はもう一度につきり笑うと電車を降りていった。ポニーテールを揺らしながら遠ざかっていくその後ろ姿を、俺はぼんやりと見ていた。探偵稼業はつらい仕事だ。俺は水野を冷静な目で容疑者として見られなくなるかもしれない。

次の日、生徒会室に行くと安田香代が一人で日誌を付けていた。一度、話を

したいと思っただけで、その時は水野抜きの方がいいような気がしていたので好都合だった。

「あら、まだいたの。早く下校しなきゃだめじゃない」

安田は先生みたいな口のきき方をした。

「君もね。なあ、誰が矢野を殺したと思う」

単刀直入に俺は用件を切り出した。多分、こんな訊き出し方が彼女には一番だ。

「さあ、彼を殺したい人間なら山程いたわよ」

安田は日誌に目を戻しながら言った。

「私を含めてね。野球部主将で女子の間で人気があったけど、泣かされた女の子を何人も知っているわ。手の早いことでは有名だったのよ。そのくせ飽きるとゴミか何かみたいポイと捨ててしまう。最低な奴」

「そいつは初耳だな」

「情報不足なんじゃないの、探偵さん」

安田は皮肉な目付きで俺を見返した。しかし、どうしてこの連中はみんな俺の悪癖を知っているんだ？

「まあ、仕方ないか……。要領だけは良かったからね」

安田はやりきれないような声を出した。

「……、私の中学からの親友が妊娠させられたの。彼女、親に問い詰められて半狂乱になってた。一度、自殺しようとしたのよ。なのに私が会いに行ったらまだあいつを庇おうとするの。私、たまらなくなって矢野の家まで抗議に行ったわ。そしたら、あいつ何て言ったと思う」

彼女は机の端をぎゅっと握り締めた。

「騙されるほうも、馬鹿なのさですって」

この気丈な少女が涙声になるのを俺は初めて見た。

「彼女が馬鹿だったことは私も認めるわよ。でも馬鹿だからって騙していいって法はどこにもないはずよ」

問わず語りにもひとしきりまくしたてると、安田は肩を震わせた。

「先を越されて残念だわ。犯人は私達五人以外の誰かなんだろうけど、当然の天誅が下っただけのことじゃない」

何と答えていいのか分からず、俺は目をそらした。

「ちよつと上に上がってくる」

その場を去る巧い口実が見つからなかったので、お茶を濁すように言って、俺は生徒会室から逃げ出した。俺の背中に向かって彼女は叫ぶように言った。「知ってる？あいつ裏口入学だったんですって。元々、この学校にいる資格なんてなかったのよ」

ストーブの上のやかんが用務員室に返されていることを除けば、屋根裏は昨日のままだった。俺は部屋の真ん中に立って目を閉じた。もう一度、あの日の光景を思い浮べてみる。むっとするような部屋の熱気、ストーブ、やかん、松沢の校章をなぞるように門を中心に矢車状に並べられたテーマ・カード、なぜそのカードは全部破られていたのか……俺の心の中であの時と同じように扉が大きな音を立てて閉まったような気がした。

アリバイのトリックが分かった。気が付けば何のことはない単純な機械的なトリックだった。俺はむしろ、わざと人目を惹いて目撃者を作り出した際に使われた心理的なトリックに感心した。

じゃあ一体誰が犯人なんだろう。矢野の裏口入学を暴いた交野が正義感に燃えてやったことなんだろうか。あまりリアリティはないけれど、交野の場合水野のことで嫉妬したという動機もないわけじゃない。

そういう水野は、事件を調べようとした俺に急に近付いてきた。生憎俺は彼女が期待する程、知り得た情報をしゃべりはしなかったが、調査の進展を一番に知り得る立場に立とうとしたことは紛れもない事実だ。だが、今のところ動機は分かっていない。

本田？彼に関しては何も分からない。どうして俺達を尾行する必要があった

んだらう。普段にも増して奇怪な行動だ。

安田――。彼女が今のところ一番明確な動機を持っている。友人の敵討ちに彼女が矢野を殺したのだろうか。彼女は俺達五人のアリバイを強調したし、矢野の裏口入学のことも知っていた……。わからない。いずれにしろ、もう少し調べてみるかなさそうだ。

部屋の隅に目を遣った。バイクのヘルメットのことでは何が引っ掛かっている。俺は苛々しながら窓の方へ歩いて行った。身体を乗り出してみる。屋上までは三メートル弱か。殺人には及ばないけれど、ここから飛び降りるのだって結構勇気がいりそうだ。

窓を乗り越えて、両腕を使って身体一杯ぶら下がってみる。屋上までは一メートル半くらいなのだろうけど足元が覚束ないのは恐かった。腕が痺れてくる。後悔したけれどももう遅い。俺は手を離して飛び降りた。踵から腰にかけて衝撃が走る。尻餅をついた俺は目を見開いた。

分かった。犯人が矢野のトレーナーを着ていた訳も。ヘルメットを被っていた訳も。そして犯人が誰かも。

けれど、俺は分かってしまったことを後悔した。一瞬だけど、このまま黙って見過ごそうかとさえ思った。しかし、そういう訳にもいくまい。犯人のためにも俺は犯人と対決しなければならぬ……。

冬

次の日曜日、人気のない校庭に彼女を呼び出した。部活は相変わらず禁止されていたので見渡すかぎり誰もいない。鉄棒にもたれて待った。約束に五分程遅れて、水野由布子が現われた。校庭の隅からゆっくりこちらに近付いてくる彼女の姿を見て、俺は唾を飲み込んだ。

「遅かったじゃないか、ワトスン君」

俺は明るく言った。

「捜査の進展はどうかね、ホームズ」

彼女は笑った。俺は次の言葉を吐くためにゆっくり息を吸い込んだ。

「犯人が分かったよ」

心なしか彼女の頬が強ばったような気がした。

「本当？」

「うん。犯人の用意したトリックも全部分かった」

「聞かせて」

「警察の質問に答えているうちに俺の中にいくつかの疑問が湧いてきた。まずなぜあの時、矢野の悲鳴は聞こえなかったんだろうということだ。普通あんな

殺され方をすれば被害者は大声で叫ぶと思う。それに続いて矢野が床に倒れる音が、聞こえなくちやおかしい。扉が閉まる音があれだけはつきり聞こえたんだから、悲鳴や倒れる音も聞こえないとおかしいはずだったんだ。これが第一の疑問」

俺は指を一本立てた。

「次に現場はなぜ密室じゃなかったんだろうと思った。窓はともかく俺が犯人なら扉の門は掛けてから逃げる。物音に気付いて人が上がって来たら鉢合わせになる事だつてあるじゃないか。少しでも人が現場に入り込むのを遅らせようとするのが犯人の心理だと思わないか。だが、門は掛かっていなかった。なぜか？これが第二の疑問」

指を二本立てた。

「それから、犯人はなぜあんな派手なトレーナを着て逃げたんだろうというのと。まるで逃げているところを目撃して下さいと言わんばかりじゃないか。これが第三の疑問」

指を三本立てる。

「いろいろ考えたけど、最初の二つの疑問にぴったり当てはまる答は、一つしか思い浮かばなかった。扉が大きな音を立てて閉まったあの時には、矢野の死体を除けば物置には誰もいなかった――。つまり、実際に殺人があったのはあ

の時じゃなかったんだ。多分、まだ誰も生徒会室に来ていない時間に殺人はあったんだよ」

「じゃあ、どうして三時五分過ぎに屋根裏の窓から犯人が飛び降りたっていう目撃者がいるの？」

「その疑問は、俺が挙げた三番目の疑問の裏返しなんだと思う。三番目の疑問の答えも一つしかあり得ないんだ。犯人は誰かに目撃してもらいたかった。言い換えれば故意に目撃者を作るために派手な服を着たんだよ」

俺は慎重に言葉を選びながら続けた。

「目撃者の証言の中に俺は一つひっかかるものを感じた。時間がはっきりし過ぎていて、ってことだ。個人差はあるけど、人間は時計を眺めて暮らしているわけじゃない。だのに目撃した生徒は何を以て三時五分過ぎと答えたんだろう」

俺は目を上げて生徒会室を見た。嫌でもその横の大時計が目に入る。

「走っていく犯人を目で追いながら、あの大時計を見たんだと思う。あの時計は遅れてばかりいたから俺らは正しい時刻は指している時刻よりいくらか後だと思ふ癖がついている。その生徒が時計を見たとき、針は三時より前だったんじゃないかと思うんだ。でも、事件の前日に時計屋が来て修理していったから、それは正しい時刻だったんだよ。そんな心理的な効果まで犯人が計算していたかどうかは分からないけど、結果は犯人に味方した。もつとも、目撃者が

二時五十分だったと言っても、十分程の誤差はあまり問題視されなかったと思う。要は三時前後の俺達五人が生徒会室にいた時刻に、犯人は大きな音をさせて扉を閉めると窓から飛び降りて逃げ去った——という図式を警察に信じ込ませることができればよかったんだ。実際に起こったことは……、多分こうだったんだ。テーマ・カードは授業が始まる前に引き裂かれて門に結ばれていた。たった一枚を残してね。ストーブも部屋の温度の上がり方からすると、早い時間から焚かれていたんだと思う。最初俺は、壁の釘と門の間をテーマ・カードで結んでおいて、ストーブを使ってカードを焼き切ることと無人の部屋で扉を閉めるトリックを構成したのかと思った。だが、実際に調べてみるとカードは全部同じように裂かれているだけで焦げたものはないということだから、犯人は別のトリックを使ったことになる。第一、紙を焼き切るなんて乱暴な方法じゃ犯人がトリックを仕掛けてから稼げる時間は数秒程度だつてことに思い当たった。この前屋根裏に上がった時、ストーブの上のやかんが用務員室に返されてなくなっているのを見て気が付いたんだ。ストーブの上にやかんが乗っていても当たり前にしか見えないけど、わざわざ用務員室から持ち出してきたということはそれが絶対必要なものだったからだ。二時四十分頃、あの暑い屋根裏で犯人は矢野が上がって来るのを待っていた。矢野は部屋の中を訝しむ暇もなかったんじゃないかな。恐らく部屋に上がり切ったところですぐに刺されたと

思うんだ。犯人との体力差を考えるとチャンスはその時しかないよ。それから犯人は、じっと待っていた。生徒会室に人が集まって来るのを、目撃者の錯覚で架空のアリバイが作り出されるタイミングを、じっと待っていたんだ」

暑い部屋の中、死体の傍にじっと立っている犯人を想像して俺は身震いした。「やがて交野が生徒会室を開け、俺との話し声が聞こえてきた頃に犯人は最後の仕上げにかかった。何か口実を設けて矢野に持って来させたトレーナを自分のトレーナの下にでも押し込んで、ヘルメットを被ると、壁の釘と扉の門をテーマ・カードで結んで蒸気を上げているやかんの口にカードをあてがって置いて、窓から脱出した。それから屋上を駆け抜けて、階段の途中にヘルメットと矢野のトレーナを残して行ったんだ。蒸気でふやけたテーマ・カードは俺達五人が生徒会室にいた時刻に檜材の扉の重みでちぎれた。そして扉は大きな音を立てて閉まった。ふやけた切り口は熱気ですぐに乾く、物音を聞きつけて上がっていった死体が転がっていたら、誰だって犯人は今逃げて行ったばかりだと考えるよ。こうやって犯人は鉄壁のアリバイを作ったんだ」

「犯人は誰なの」

「犯人は生徒会執行部のメンバーしか知らないようなことをよく知っていた。物置にしまっているものに熟知していたし、俺達があの日何時から練習を始めるかも知っていた。アリバイの一件さえなければ俺達五人は警察のブラックリ

ストのトップだったはずなんだ。だから、犯行時間が実はもっと早い時間だと分かった時から、犯人は俺を除く執行委員四人の中の誰かだと俺は確信していた。じゃあ、四人のうちの誰だったのか？ ヒントは二つも目の前にあったのに俺はずっと気付かなかった。大馬鹿者さ」

俺はもう一度、唾を飲み込んだ。いよいよ、大詰めだ。

「第一のヒントは、犯人がなぜ矢野のトレーナを着て逃げたのかということだ。アリバイ工作上、派手で目立つ服装でなきやいけなかった、――それは確かだったけど、なぜわざわざ矢野に持って来させてまであのトレーナに拘ったのか？ 私服は足がつく可能性があるから論外としても、やろうと思えばどこかの部活のユニホームを失敬して着ることだってできたはずだ。あのトレーナと違ってユニホームには必ず予備があるものだし、一着なくなっても、すぐには気付かないと思う。犯行の後すぐに戻しておけば永遠にばれないし、警察の目はその部活に向くはずだ。けど、犯人はそうしなかった。……多分、特定の人物に容疑が掛からないように気を配ったんだよ。矢野のトレーナを着ていれば、少なくとも服装から犯人を特定することはできなくなるだろ。この事は、犯人を指し示す決め手にはならないけど、その性格を知る手掛かりになった。きっと、犯人は本来優しくして人を思い遣ることを知っている人物だ」

俺は少し目を細めて水野を見た。

「第二のヒントは、なぜ犯人はヘルメットを被って逃げたのかということだ。この間気付いたけど、生徒会室の窓から校庭を歩いて行く人間はとても小さく見えるんだ。後ろを向いていたり、屋上を走っていたりしたら、とても顔は判別できない。だから犯人は顔を隠すためだけなら、ヘルメットを被る必要はなかったはずなんだ。それに、実際に屋根裏の窓から飛び降りて思ったんだが、何も被っていないくたつて結構恐かった。まして、重くて視界の狭くなるヘルメットを被ればなおのことだと思う。それに、重くてぶかぶかのヘルメットは屋上を走って逃げるのにも不向きだ。むしろ顔を隠すだけなら、屋根裏に置いてある演劇部の仮面の方を選びそうなものじゃないか。でも、犯人は敢えてヘルメットを選んだ」

「何故？」

「犯人はこう考えたんだと思う。トリックは所詮トリックだ。発覚する可能性を常に胎んでいる。そして、発覚すれば俺と同じ筋道を辿って容疑は生徒会執行委員に向けられる。その時の用心のために犯人はあることを隠さなきゃならなかった。執行委員の背格好はよく似ているからそこからは特定が難しい。けど、顔立ちが分からない程の距離からでもはっきり分かることもある。犯人は目撃者にこう言われるのを恐れたんだ。『犯人はポニーテールをしていました』——俺達五人の中ではっきり髪型が判別できるのは君だけだ。だから、仮面で

はなくヘルメットである必要があったんだ」

「お見事だわ、ホームズ」

彼女は笑いながら言った。その笑顔はいつもと、ちっとも変わらなかった。でも、考えてもみて。急に髪型を変えたりしたらもつと怪しまれたと思わない？」

「動機を聞かせてくれないか」

俺はそれには応えずに問い返した。

「ねえ、あなた自分で気が付いていた？あなたの歌声ってとてもきれいなよ」

水野ははぐらかすように、また笑いながら言った。

「もう一度『おさななじみ』を歌ってみせてよ」

俺は、何か言い返そうとしたのだが、言葉が喉につかえて出てこなかった。

水野の大きな瞳が真剣に俺を見つめていて、喉が竦んでしまったのだ。

俺は仕方なく、肩をすくめて喉を緩めると彼女の瞳を見返したまま歌いだした。

「幼なじみの思い出は

青いレモンの味がする。

閉じるまぶたのその裏に

幼い姿の君とぼく……」

俺の歌を聴いている水野の目尻から、不意に涙がこぼれた。――俺は歌い止めてじっと彼女を見た。水野は静かに頬の涙を拭いとると、話し始めた。

「家の近所に裕介君という子が住んでいたの。わたしと二カ月違いの誕生日で、幼稚園も、小学校も、中学校もずっと一緒だった。よく本の貸しっこをしたり、学校の帰りに遊んだり、中学の頃は一緒に宿題をしたりしてたわ。初恋の人とかいうんじゃないの。もつと……、何て言ったらいいのかな……。そう、彼はわたしにとって空気みたいな人だった。そこにいるのが当たり前だったのよ。わたしは彼のことを『裕ちゃん』って呼んでいて、彼もわたしのことを『由布ちゃん』って呼んでいて、たったそれだけの事で心がくすぐったくなるようなそんな友達だったの。去年わたしが松沢を受けるって話したら、裕ちゃん、『なら、俺も松沢を受ける』って言ったの。わたしと同じ高校に行きたいんだって、顔を真っ赤にして、何度もつつかえつつかえ言ったの……。彼なりの真剣なプロポーズだったのよ。嬉しかった……。彼に打ち明けられて初めて気付いたの。それまで自分が感じていたよりずっと、裕ちゃんはわたしにとって大切な存在だったんだって。松沢はわたしにとっても、彼にとっても、難関だったけど、その日のことを思い出すだけでわたし幾らでも頑張れた」

水野は遠い目をしながら続けた。

「彼……、不合格だった。合格発表の日、悔し涙流しながら『おかしい。おか

しい』って何度も言い続けていたわ。わたしどうやって慰めたらいいのか分からなかった。次の日、彼はもう家にいなかった。受験勉強の息抜きだって言って、秋と一緒に遊びに行った海に飛び込んで死んだわ……。今年の五月頃わたし、交野君のノートを見てしまったの。ほら、あなたが慌てて交野君のカバンに突っ込んだあのノートよ」

水野は悪戯っぽく笑った。

「裕ちゃんは本当はわたしなんかより、ずっといい成績で合格していた。なのに、矢野君の不正入学の犠牲にされたの。わたし心の中であの人たちを罵った——裕ちゃんを返せって。矢野君も、彼のお父さんも、先生も、みんなまとめて死んじゃえって。……。死ねって。死んで裕ちゃんに詫びろって。でも、もちろん殺すことなんかできなかつた。恐かつたし、人殺しは、人殺しでしかないことは分かっていたから——。あなたが言うようにたとえ動機があつても、殺人事件が起きるとは限らないのよ」

水野の目は、今までに見たことがない程鋭かつた。

「それでも、学園祭の寸劇で『おさななじみ』を演ろうっていう意見が出た時、わたしそれだけは堪忍してほしいと思った。いやでも裕ちゃんのことを思い出しちゃうし、矢野君と組んで幼なじみの恋人同士を演じるなんて死んでも嫌だつた……。」

不意に水野の表情が揺れて、また泣きだしそうになった。水野はぎゅっと唇を噛んで涙が零れるのをこらえようとしている。

俺は彼女の顔を見つめたまま辛抱強く次の言葉を待った。  
やがて、彼女は口を開くとぽつりと言った。

「あいつ……、本当にキスしたの」

俺らの足元を風が吹き抜けて彼女のスカートをはためかせた。

「二週間前の寸劇の練習をしている時、あなたの言う殺人の衝動が一線を越えてしまったんだ……と思う。あなた達は両脇で歌っていたから、気付かなかつたと思うけど、傘の陰であいつ……、あいつ……。本当にくちびる、押し付けてきたの」

水野はまた唇を噛んで、黙りこくった。音が聴こえてきそうなほど肩を、体を震わせている。

「裕ちゃんを奪っただけじゃ飽き足らないの？なんで、遊び半分であんなことする男が生きてるのに、裕ちゃんは死ななきゃいけないかったの？裕ちゃんがあいつに何か悪いことしたの？ぐるぐるぐるぐる——、嫌な気持ちで頭の中が一杯になって、顔を離れた後に見せたあいつのいやらしい笑い顔が頭にこびり付いて離れなくなって、そしたら、頭の中がかっと熱くなって……」

水野の言葉がふっと途切れた。ぜいぜいと息を切らせて激しく肩を上下させ

ながら、じつと俺の肩越しに宙の一点を睨んでいる。

長い沈黙のあと、まるでふと思いついたかのように……。低い声でぽつりと水野は呟いた。

「殺してやるって思った。……。あのとき、私の中で何かが切れてしまったみたい」

水野はもう一度、肩を大きく震わせた。その目がふっと潤んだ。

「わたしを見付けてくれてありがとう。あいつを殺すまでは無我夢中だったけど、殺した途端後悔したの。取り返しの付かないことをしてしまったんだって。何度も警察に行こうとしたけど、恐くて結局行けなかった。でも、警察が捜査を進めてわたしを逮捕しに来るのをじつと待ってるのも恐かった。今日かもしれない、今日は大丈夫だったけど明日かもしれない。そんなことばかり考えると気が変になりそうだった。だから、じつとしていられなくて自分から何か行動を起こしたかった。でも、誰かに打ち明けられるような事じゃないし、ずるいやり方だとは分かっていたけどあなたに賭けることにしたの。あなたなら、いつか真相に辿り着いて警察に話してくれる気がしたから。あなただのそばにいれば、それがいつか分かると思ったから。一つ読みが外れたのはあなたが直接警察に行かずに、わたしに報せてくれたことね」

「君に黙って告げ口するのは悪い事のような気がしたんだ。やっぱりワトスン

を裏切る訳にはいかないじゃないか」

「……、ありがとう」

彼女の目尻から涙がこぼれだした。そのまま彼女は俺の肩に額をのせてしばらく泣いていた。

「本当に恐かった……。毎晩、毎晩、眠ろうとすると心の中で悪魔がささやくの。次はあいつの父親を殺せ、あの先生を殺せ、一人殺してしまえば二人も三人も同じ事だって。わたし、また誰かを殺してしまいそうだった。もう……、誰も殺したくなくなかったのに……」

水野は俺の肩の上でしゃくり上げていた。俺はぎこちなく彼女の肩を支えてやりながら、彼女が体の力を抜いて俺に寄りかかっているのを感じた。心底、気持ちが悪くなったのだろう。

「交野の親父さんの所に行こうか。多分、警察よりは気が楽だよ」  
「うん」

彼女は少し照れ臭そうに笑った。少しだけけれど、俺は報われた気がした。少なくとも、彼女は連続殺人犯にならずに済んだのだ。

あれから二週間が過ぎた。水野の処分はまだ決まっていなない。交野のノートが親父さんに手渡され、関係者が一斉に逮捕されたことは新聞にも書かれてい

たから周知のことと思う。実はあのノートは交野と安田の共同作業だったらしい。交野達が不正入試のことを知ったのは去年の今頃だった。資料の整理で安田と遅くまで残っていた日、使っていないはずの応接室の明かりが点いていたので、消しに入ろうとしたのがきっかけだった。首謀格の二人の教師の密談を二人は聞いてしまったのだ。

それから、持ち前の正義感と生徒会会長、副会長の立場を利用して一年がかりで二人が調べ上げた成果があこのノートだったというわけだ。俺は改めて二人の行動力を見なおした。

学校はまた平静を取り戻した――。生徒会室の窓から校庭を眺めていると、「よう」と言っただけで本田が近付いて来た。

「一つ聞いていいか」

「何だ」

「どうして、あの時俺たちの後を尾行けたんだ」

本田は怪訝そうな顔をしたが、すぐに何の話か気づいたようで、肩を震わせるとくつくつと笑い出した。それから、いつもの渋面に戻ってむっつりと言った。

「別に、尾行けたわけじゃない」

少し照れ臭そうな顔になって本田は後ろを向いた。俺は思わず吹き出してし

まった。何だそういうことか。本田のズボンには、まだ新しい継ぎあてがしてあった。

「俺、水野のことがちよつと好きだったんだ。ズボンが破れているのにお前達の前を歩く訳にいかないじゃないか。そうかといつてあの道を通らなきゃ帰れない。お前達がさつさと行ってくればいいのにと、ずっと思いながら歩いてきたよ。それが角を曲がったらお前たちの姿が見えなくなっていたんで、今のうちだと思つて一目散に走つて帰つたのさ」

俺達はひとしきり低く笑つた。まあ、俺の推理なんてこんなものだ。

「彼女、罪が軽いといいな」

「ああ」

言つて本田は空を見上げた。本格的な冬の到来を告げるように、木枯らしが吹き過ぎた。春遠からじとは言い難かつたけれど、それでもいつかまた春は来る――。そんな思いが俺の胸の中を駆け抜けていった。

了